福山大学人間文化学部紀要
第4巻(2004) 99頁～126頁

第二次大戦末期北京における人文・社会経済系高等教育及び日本語教育の展開過程
— 中目(なかのめ) 覺(あきら)（院長・所長）を中心に —
(1)

石　田　　寛

序

1．研究の目的・意味と仮説・キーワード

中国大陸（除、旧・満州）において、日本人を対象とした人文・社会経済系高等教育機関として上海の東亜同文書院（1939年大学昇格）と北京経済専門学校があった。東亜同文書院は本間喜一学長以下教員の多くが豊橋市に創設した愛知大学の構成員になり、資料・研究の多くが継承されている。財団法人北京同学会の北京興亜学院は1943年東亜同文会へ経営移管され、その翌1944年8月に北京経済専門学校と改称する。前者は2001年に百周年記念事業を開催し、後者は二年おくれて2003年6月10日、百周年記念日を迎えた。

東亜同文書院に就いては、広く知られ、その学生達のユニークな調査記録が、地域研究の先駆的業績として藤田佳久教授によって公刊され注目を浴びている(1)。さらに本格的な『東亜同文会史』が霞山会によって編纂刊行されている（2003年8月)。それに比べて北京の日本人高等教育機関　北京興亜学院、その後身北京経済専門学校については、那須清九大名誉教授の研究があるに過ぎない(2)。同教授は自分は語学者であり、歴史家ではないので、資料集録にとどめると謙遜されながらも、ごく限られた頁数に、その歴史を簡述している(3)。前述した霞山会の『東亜同文会史・昭和編』は北京興亜学院の貴重な資料（いずれも昭和18、19年、つまり興亜学院が東亜同文会の経営下に入る前後）を収録してはいるが、興亜学院・北京経専に関する記述は殆んどない。筆者は那須清の二つの著書に収録された資料を用い、『同文会史』にも目配りしながら、別の角度から中目覺の業績に重点を置いて歴史を組立てようと試みるものである。その新しい見解、すなわち提示する仮説は次の通りである。

> 北京における日本人高等教育機関の整備・確立は中目覺によってなされていたこと、さらに中国人相手の日本語教育機関の整備も、日本語教育の研究機関の組織化・運営もまた中目覺の類(たぐい)稀な組織力・指導力によってなされた。その間、中目は教育行政家であっただけでなく研究者として注目すべき著作をしている。最も注目すべきは経国学

石田　　寛

（科）である。日本国内では偏った地政学が幅をきかせていたのに比べて中目覺のゲオポリチク（地政学と訳さず、経国学と呼んだ）は、地理学史研究の上からも改めて見直すべきものである。

本論は、多才・先駆的学者・教育家中目覺評伝[4]の一部として書かれながら、未公表のままであった草稿を組替えしたもので、中目覺の業績を通して、戦争末期北京における日本人高等教育及び（中国人を対象とする）日本語教育の展開過程を明らかにしようとするものである。筆者は中目覺の北京在勤中には北京を訪れていないが、たまたまその前と後に北京を訪れ、偶然ではあったが中目覺を支えた人物とも会っているなど、出会い・関連の絆の不思議議な縁を改めて感ずるものである。

本論文の前半は興亜学院中心の論述であるのに対して、後半は北京における日本語教育の問題である。日本では戦後40年を経て漸く、論ぜられるようになった日本語教育の数々の議論・理論の先駆とも言えるものである。北京でみられた研究・論争は、八ヵ国語を話せる語学の天才中目覺のリーダーシップの下で展開され組織化されたものである。

短命（９年10ヶ月）に終った北京市における日本人高等教育機関の長（８人も交代）のうち、中目は専任として実に３分の１の期間をつとめている。

〈筆者の立場・視座〉

筆者は広島高師・広島大学地理の後継者として初代教授中目覺（1874～1959）の評伝作成に当ってきた。そして本論では、教育・研究機関における長としての中目の仕事が関心事である。今迄筆者はいろいろな学校史の編纂に当たったが[5]、その経験が第一の視座を提供してくれる。

第二の視座は外国語教育、ことに日本語の教育・研究についてである。これは筆者の授業経験・テキスト作成及び授業の組織化が、おのずから視座となっている。筆者は1963年ニュージーランドのオークランド大学（University of Auckland）の成人教育部において、一年間長沼直兄著『標準日本語讀本』巻１．長風社を教科書として用い、日本語を担当し、それが同大学における日本語教育教室設立の契機となった。オークランド大学での受講生は、民族・言語文化的に、また年齢からみてもきわめて多様であった。私は“対訳法”（主として英語で説明）と“直接法”を適当に混ぜながら試行錯誤した。それが、さらに予想外の発展・拡がりを見せることになる[6]。さらにまた福山大学においてアメリカ　カリフォルニア大学リバーサイド校との大学交流計画に基き、日本語（初級・中級それぞれ）12単位の教育実施担当責任者として企画・運営に当った[7]。筆者自身の、日本語の直接授業及び授業計画・運営の体験が、日本語教育への関心をさらに深めた。

〈キーワード〉

学則（校則）、教授要目（シラバス）、専門学校令、徴集延期、同学会、東亜同文会、経国学（ゲオポリティーク）、日本語教育、直接法、対訳法、宿命論（fatalism）

2．中目覺を北京へ迎える背景、北京での中目覺の仕事の概要

上述の如き同学会内部の事情から大物院長待望の声が高く、中目覺（なかのめあきら）の北京赴任となったのである。

興亜学院は明治36年北京に創立された支那語研究舎を濫觴とする私学で、大正14年北京同学会語学校として発展する。

北京同学会語学校は日本人に華語を教え中国人に日語を教えるという学校で、日語科設置は昭和３年５月であった。華語科に正科（２年制）、研究科（１年制）、選科（２年制）と夜学（２年制）があった。日語科には普通科（３ヵ月）と高等科（３ヵ月）があった。全体を統べる校長と事務を処理する主事は日本人であった。そして日語科に日本人講師が１人だけいて他はすべて華人であった。昭和９年から10年にかけて会長辻野朔次郎を中心に組織化される(8)。

華語科の正科・研究科は、昭和10年北京市内東域の小羊毛胡同に移転していた。那須清によれば「昭和14年から専門学校への体制を整えはじめていた」(9)。本科を三年とし、研究科を廃し、中国語を第一外国語とする旧制高等商業学校への改組を目標と決める。別科及び日本語班、夜学科は一般居留民の通学に便利な従来の三条胡同の居留民団敷地へ残して中国語や日本語の夜間の講習の実を挙げるように図った。昭和13年３月就任した加藤惟孝が教務長として、校長辻野朔次郎を輔ける。早速、昭和14年には、専門学校をめざすべく、非常勤講師の充実をはかる(10)。中国語担当者に専任講師として中国人３人のほか非常勤日本人１名を任命し、社会科学の兼任講師として井上晴丸（中国経済）らを興亜院などから招く。さらに随時講演者をも招いた。

かくして、加藤惟孝教務長の積極的運営は高く評価された。ところが、高齢化（明治９年生れ）病弱の辻野朔次郎会長（校長職に同じ）に対し居留民の間から、在華日本人の最高教育機関の長としては不満足であるとの声が起った。そして、学生の間からは興亜院直轄学校になり北京興亜学院と改名しているのに組織造りに消極的な辻野院長排斥のストライキが起った。そのストライキの最中（さなか）に辻野は死去し、興亜院華北連絡部（文化局）辻田力が校長事務取扱となる。このような状況下で、現地北京の要望に応える人物として、文部省が白羽の矢を立てて北京へ派遣したのがこの中目覺で、「文部省より北京興亜学院へ出向」(11)という形で北京興亜学院長に就任・赴任する。

中目覺の大阪外語初代校長としての力量、語学力は、既に北京の学院に伝わっており、それが、学生をはじめ教職員の歓迎振り(12)から窺われる。「勲章をつけて正式な席に並ぶ時は、当時の軍司令官より上席になるという大変なものという事でした」（畑中恒実、興亜学院第３期生）(12)、「昭和十六年春、私が入学した当時耳にした学院長の評判は、同学会が迎えた久々の“大物”、しかも数ヶ国語に通暁した語学教育界の権威ということであった」（興亜学院第５期生、田中実）(13)。

中目覺はわずか、３年２ヶ月の北京在勤中、北京興亜学院の昇格（旧制高商）のほか、北京

日本語学院長と華北日本語教育研究所長を兼任し、この三つを組織化し、見事な人事、組織力と指導性で、北京におけるユニークな高等教育者として大きな成果をあげる。すなわち、若い日本人生徒を教える北京興亜学院には教務長として加藤惟孝教授が、北京中央日本語学院の教務長としては秦純乗教授、教育研究所には、出雲路善尊（前半１年３ヶ月間）、国府種武（後半、１年３ヶ月間）がいて、中目覺をよく支える（図１）。なお、興亜学院をはじめ関係教育機関の所在地は図２に示す如くである。

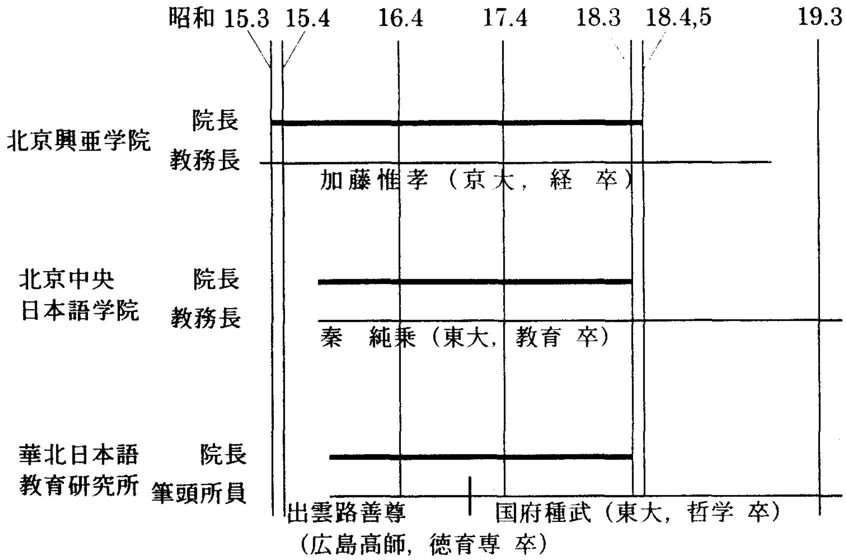
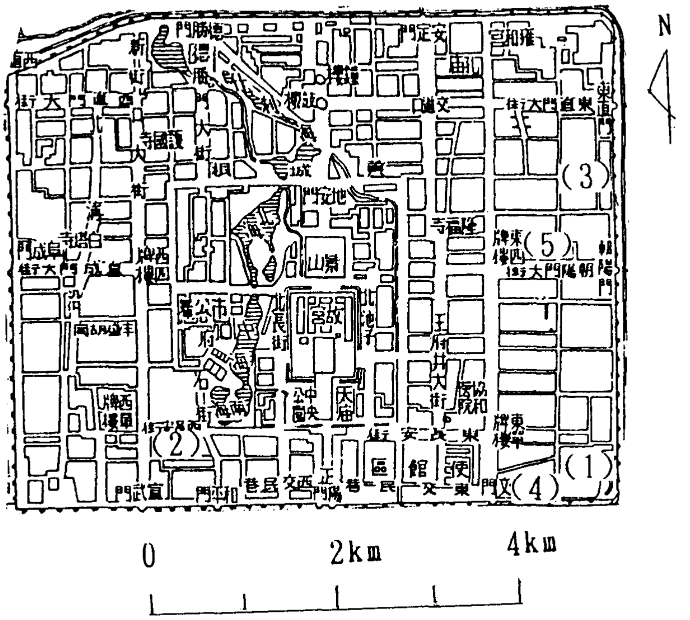


図１　中目覺所管三つの教育機関　―中目在任期間と筆頭補佐役―

今迄、中目覺を迎える北京の事情を述べ、中目在任３年余の三機関の管理運営の組織化の一端に触れた。ここで中目覺退任後のことに少し言及せねばならない。北京興亜学院とその改名校である北京経専を通算して、わずか９年10ヶ月という短い歴史のなかで、その機関の長が８人も入れ替っており、しかも５人は院（校）長事務取扱い、つまり兼務である。専任の院（校）



備考１．図中かっこ内の数字は下記機関・施設を示し、機関施設名の下はその所在町名を示す。
(1)興亜学院
(2)経済専門学校
(3)維新寮（第一寮）
小羊毛胡同二十六号
絨線胡同七十九号
北京芽胡同二十五号
(4)赤山寮（中目・佐藤先生居所）
(5)北京中央日本語学院・華北日本語教育研究所
江擦胡同五号
東西北大街頭条胡同五号
２．北京・新民印書館「北京案内記」（1942）地図により森下博が作成。

図２　北京興亜学院，北京経済専門学校，北京中央日本語学院，華北日本語教育研究所などの立地（1942年）

長3人についてみても、初代は既述の如く、殆んど何も出来ず死去、もう1人北京経専初代校長も急死短命である。9年10ヶ月のうち、中目覺は3年1ヶ月余り、すなわち三分の一の期間を務めているのである。教育行政官としてのみならず、授業も多く担当し、さらに二つ日本語教育研究機関の長をも務め、その上ユニークな著作をし、その研究が北京興亜学院の学科目構成に大きく反映しているのである。北京における文系高等教育の展開を研究するに当っては、特に中目覺に光を当てることの必要性がある。

3．謝辞・資料

中目覺の四男中目伊四彦氏は『経国概論』、『授業要目』『華北日本語』（創刊号）など貴重な資料・情報提供のうえ、大阪外大元学長伊地智善継教授（支那語）に協力を依頼して下され、その伊地智教授の高配によって九大名誉教授那須清未亡人及び森下博氏より直接・間接絶大の協力を得られるようになった。かくて得られた次の3文献は貴重である。

(1) 那須清編『北京同学会の回想』、不二出版、1995.

(2) 『燕京同学会会報』

(3) 森下博編『北京興亜学院長・中目覺先生の思い出―1940～'43―』（本、続）1999.2001、非売品．本冊子は筆者の研究に呼応して、卒業生から貴重な情報を求め、編纂されたものである。この森下氏の、私家版には中目伊四彦氏から提供された『授業要目』、『報国團誌』などを始め、多くの資料が収録されている。この『思い出』の外に、森下博氏が筆者の質問に応えて寄せられた手紙は厖大な量に及ぶ。この『森下書簡綴』（1999～）こそ得難い資料である。なお、同氏は『北京同学会関係（者）出版書目一覧』（私家版、2003）などを出している。

ちなみに、中目覺は家蔵古書・自分の購入書籍・自著のほとんど全部を宮城県の寿庵文庫（注3を参照）に寄贈しながら、前記3つは枚方の家に残されていた点に大きな意味を覚える。著書『経国概論』に就いては本論文で随所に言及・論述する。日本語研究推進の軸たるべく中目覺が創刊した『華北日本語』（月刊）は本論展開のための重要資料である。情報検索では、広島大学および福山大学・福山平成大学の附属図書館の協力を得た。

日本人は昭和15年頃には北京にまだあまり居住していなかった(14)が、昭和17年4月刊行『北京案内記』には、総人口176万6184人中、日本人は8万983人になっており(15)、昭和18年には、広島市と同じ位の数の日本人が居留していたといわれる(16)。その北京における人文・社会経済系唯一の日本人高等教育機関北京興亜学院についてさらに学院史作成の必要性を感じた。

上述貴重な資料を組立てることによって、中目覺に重点をおいた北京興亜学院の歴史（A History of Ko-a College）を書くことができたのである。改めて中目伊四彦氏・森下博氏を始め多くの方々に謝意を表したい。なおまた、本論の仕上げに協力をして下さった沖慶子・阿南達子・Carol L. Fujii の三女史に感謝する次第である。

石田　寛

第１章　北京興亜学院：リベラルな少人数教育、旧制高等専門学校認可

第１節　同学会語学校から北京興亜学院改組直後の煩雑・多忙

北京の３月はまだ寒く、花も殆んど開かない。黄塵まで襲来して、日本からの来訪者にはこたえる。さなきだに多忙な学年度末行事に、新旧２つの制度が重なり繁雑である。その上新しく発足した興亜学院の学則制定という大仕事が新院長中目覺の着任を待ち構えていた。「師（中目覺）の学院長就任で沈滞気味の校風が盛り上った」と王進益（昭和13年４月、前身校同学会語学校へ入学していて、在学２年目の最後に中目院長を迎え、興亜学院3年生へ進学し、興亜学院第２期生となった）は云っている(17)。

１．移行期措置：５人の卒業式と興亜学院第三学年編入学

中目覺は15年３月に赴任。“私塾同然の”(18)学校を施設、授業内容、教授陣の充実、そして経営母体の経済的強化など難関問題が待ち構えていた。３月20日に北京興亜学院第一回卒業式を挙行する(19)。移行期における生徒の取扱いは学校管理・運営の任に当る者のもっとも気を遣うところである。中目院長は同学会語学校卒業予定者に予定通りここで出るか、それとも興亜学院の３年に進学を希望するかをゆっくり語り合う(20)。その結果、組織替えした北京興亜學院の第３学年へ編入せず、同学会語学校（二年制）を卒業していくのは山田二朗、上川名和郎ら５人で、その卒業式が挙行される。内藤功、水口幸哉、王進益ら40人は昇格した三年制になった興亜学院第三学年に転入学する。同学会語学校入学者数70人と上記数字からみて不明者数が余りにも多く、疑念さえおこる。この点について、前記王進益（台湾出身）提供の「思い出」(21)ですべてが氷解されよう。

昭和13年４月入学者は70余人、15年３月同学会語学校卒業者（興亜学院第１期生として卒業）は５人、ところが15年３月興亜学院第２期生として卒業したもの40人にすぎない。従って、死亡・消息不明者が25名余りいることになる。この中に王進益のいう陸海軍関係者（陸士・海兵卒）、外務省、満鉄などからの派遣留学生、日本の大学からの留学生がいた。彼等は何時の間にか“消えるエリート学生”であり、それがこの語学校の特色でもあった。

昭和13年入学者について、もう１つ興味深いことは同学会語学校２年生は夏休みに北京語の実習訓練の一環として満鉄経済調査団の通訳として約45日間、北支各地に送られていたことである。４ないし５つの班が奥地にまで送り込まれ（１日15円という信ぜられないほどの高額手当てが与えられ）ていた。ちなみに王進益(22)は美濃崎敏治とともに山西省班の配属となり、楡次、平遙、介休、霊石と33～35℃の炎熱下の奥地で苦労しただけに忘れられないと述懐する。

（付記）満鉄調査団通訳のことは、那須清『北京同学会の回想』には、載せられていないことであるが、この『那須回想』は昭和12～13年の軍隊通訳のことを次の如く記している(23)。

昭和12年７月、支那事変勃発と同時に、牟田口、山下両部隊の通訳として別科生の中の中国語を話せる大部分の人が従軍した。13年３月当時は、これら従軍学生が帰校しつつあった。

『那須回想』はまた別の箇所で参加者約70人（うち戦死者１名）と記している。王進益の前述情報とあわせ考えると、昭和12～13年には軍隊の通訳従軍、昭和14年夏のは満鉄調査部通訳があった。15年以後は治安が悪くなったため、語学実習をかねた調査旅行は考慮されたものの、実施にいたらなかったという。

２．入学試験と学則作成

興亜学院として第一回入学試験が３月25、26日北京本校のほか東京、大阪、福岡で実施される。この入試に合格、後に九州大学教授となった那須清は次の如く記している。

> 当時北京興亜学院は受験界でも決して軽視されていなかった。昭和15年ごろの受験雑誌には大抵毎月のように学院志願者の声が出ていた。われわれも学院は実質的には官立学校であって、外地なるが故に私立の形式をとっているのだという話を聞かされて大いに張切っていた。[24]

志願者が370人あり104名の合格者を得る。この入試は新しい学則（“暫定学則”第２節参照）の下で、実施されたものであり、この様子をみよう。新院長采配の下で教務長加藤惟孝は学則仕上げに全力を傾注する。その頃の加藤惟孝の様子が次の『中江丑吉書簡』[25]にみえる。

> 加藤惟孝最近は漸く校務に真面目に努力、以前の微弱なインマル然たる青臭さ、多少とも脱け出て来ました。如何なる本よりも同学校を少しでも立派にするのが、一番好い教科書也、と此間も云ってやりました。ヘーゲル流に云へば、若し加藤が此教科書を真面目に読み終ったら、必ず過去のインマルよりも立派な持物が出来ると楽み傍観しています。

上記引用文にみえるインマルはインテリ・マルキストの略で、中目覺の舵取よろしく、諸事進行している姿がみえる。

第２節　昭和15年度：新入生退学騒動と院長の真骨頂

１．中目院長の心意気、新入生大量退学騒動

上述の（“暫定”）学則（専門学校令による専門学校の学則を便宜上“専令”学則と、本論で呼ぶのに対して、三年制に組織替えした興亜学院学則を“暫定”学則と呼ぶことにする）が仕上り、授業は順調に進行する筈であった。

中目覺院長は興亜学院をめざした合格者百名（欠席もあって）を前に入学の式典を行う。“駱駝の背にまたがり星を見詰めて旅し…”との式辞は、入学者に強い印象を与える。

この種の名文句、名調子は中目覺にとっては単なる修辞・レトリックではない。ウィーン大学留学中日露戦争の戦火が治ると直ちに、単身ウクライナ、東欧へ調査を敢行し、「我国に保存されていた古代土耳其文字」(1918)、「中亜の気候変動と我国への影響」(1919) などの論文に結実し大きな反響を呼んだ。若い日の研究・論文の裏付けあっての言葉ゆえ、入学生に強烈な印象を与えたものと考えられる。

退学者続出という事件が起る。ところが、同じ第4期生でも第一学期の5、6月に出たとするメモもあれば[26]、夏休み帰国したまま学院へ戻って来ない者がいたとする（中楠鍼[27]）ように期日に大きなずれがある。不満・不平の原因も『生徒募集』に記された“在学中の兵役徴集延期申請中及び日本の専門学校認可（準備中）”の二つが実現していない、あるいは教室施設の不備、同学会語学校時代と殆んど変らぬ支那語の授業形態などが挙げられた。5月15日専門学校昇格の見透しについての質問に対し、今後5年間は昇格の見込みなし、帰りたい者は帰れ、と中目院長は応待し、その後第4期生（新入生）は授業を放棄する[28]。あの美しい森の都、北京も5月10日頃から気温が急上昇するので、日本内地からの新入生はさもなくても罹りがちな“五月病”を増幅させたのではなかろうか。

それはそれとして那須清によれば支那語授業についての指摘の背景について考えてみよう。昭和15年度は同学会語学校の授業とは全面的に変った興亜学院のカリキュラムに従って行われる筈であった（表2）。那須清が華語の授業は週24時間、しかも全部中国人で、大家とはいえ日本語を全然話せぬ教師もいて、それまでの同学会語学校の授業に近いものであった[29]。それが昭和15年興亜学院入学生の期待と大きく喰違っていた点であったと考えられる。表1によって、授業時間数などから語学校時代の延長にすぎなかったことが認められよう。

授業で一番問題になった華語（中国語）についてみよう。表1の日本の専門学校令によらない興亜学院学則（“暫定”学則）に従って行われる筈であったが、週当り授業時間数、教師（国籍）からみて、同学会語学校と余り変りなかったことが分る。

ところが、そのほかに就いては日本人教師によって“暫定”学則に従って行われていたこと、中目院長自身が三年生に英語、経国学などを教えていたことは、後に引用する王進益の回想[30]から知られる（注31を参照)。

これにみるように、中目覺は生徒に希望的憶測を述べるようなことをせず逆に、去る者は追

表1　同学会語学校・北京興亜学院の授業（1年生）・教員数の比較

	週時間数			教師の国籍		
	華語	支那事情・それ以外	全体	中国人	日本人	その他
同学会語学校校則[1]	26	2	28	12	2	0
日本の専門学校令によらない興亜学院学則[2]（“暫定”学則）	16	16	32	16	13	0
専門学校令による興亜学院学則[3]（昭和17年以後）（“専令”学則）	12	20	32	9	15	2*

資料：(1)「昭和十年度　北京同学会語学学校概覧」那須清編『北京同学会の回想』、pp.187-213.
(2)「北京興亜学院一覧　昭和15年」上掲書、pp.215-250.
(3)「北京興亜学院一覧　昭和17年」上掲書、pp.253-293.
*ロシア人1人、蒙古人1人

表2　学科目及び毎週授業時間数（"暫定" 学則によるもの）（昭和15年4月1日より施行）

学科目	内容	第一学年		第二学年		第三学年	
		夏学期	冬学期	夏学期	冬学期	夏学期	冬学期
皇民科	倫理	1	1	1	1	1	1
	世界事情					2	2
	経済概論	2	2				
	法学通論	1	1				
	国語	2	2				
	日本文化史			2	2	1	1
支那学	東洋史及地理	2	2				
	支那思想史			2	2		
支那経済	支那社会経済史					2	2
	支那農業			2	2		
	支那商工業			2	2		
	支那金融及貿易					2	2
商業実務	簿記及会計 商業作文 商業算術	1	1	1	1	2	2
支那語	支那語	16	16	14	14	14	14
外国語	英語	3	3	3	3	3	3
教練	教練	2	2	2	2	2	2
体育	体育	1	1	1	1	1	1
演習	演習	1	1	2	2	2	2
	計	32	32	32	32	32	32

資料：那須清『北京同学会の回想』、pp.221-222.

わずついてくる者はついて来いと、突っ放す態度に出たようである。授業に関してはここに示した表3（"暫定" 学則）の通りいく筈であったが、一部改革が間に合わなかったのである。

2．院長の国際的存在感と "カレッヂ" 北京興亜学院

退学騒動にひるまず前向きに局面展開に立ち向う中目覺の姿が次の二つの催しにおける立居振舞いによく表われている。

六月十日、開学記念式典が盛大に挙行された。『那須回想』も『春日・那須メモ』(31)いづれも、言及していないが、博覧強記と文才で知られる王進益は式典と中目覺院長について次の如く回想する(32)。

> 北京在住の欧米人学者、アメリカンスクールの教授学生が招かれ、中目先生は主に英語で、仏語、ドイツ語を適当に交えて挨拶され、この興亜学院は私人組織によるカレッヂであることを言明されていた。主賓とも北京語を交わし熱弁、熱演を振い、マロニエの葉陰が北京の青空に映え、国際色豊かなものであった。この日こそ、北京興亜学院が外国人学生をも招待した最初の会であり、国際人中目先生の真価が遺憾なく発揮された日であった。

もう一つの会については、王進益は言及していないが、別のメモに次のように出てくる[33]。

10月11日、興亜学院において北京学生会があり、夕食の後映画ポーランド進軍、勤労報国隊の報告あり、学院長ドイツ語の歌を披露す。興亜院文化局長の講演は不評であった。

院長中目覺の面目躍如たるものがあり、参加学生が院長を見直し、信頼度を高めた過程が読みとれる。

3．専門学校令による旧制高等専門学校めざして

北京にある三年制興亜学院の学則（“暫定”学則）は昭和15年３月にできたものの、中目院長らは（日本の旧制高等商業学校として認定されるだけの）学則（“専令”学則）作成とそれを実施するための教授陣容および施設整備に急いで取掛からねばならなかった。

(1)　施設整備

新入生が指摘した施設も次第に充実していく。興亜学院第一寮の４月創設に続いて６月に教室用煉瓦二階建一棟の増築をみた。そして10月に仙台出身の実業家赤山今朝治氏寄贈の生徒集会所赤山閣が竣工し、院長、佐藤三代治教授（後述）もその一隅に住む。小羊毛胡同キャンパス施設、教員組織が漸く整いかけた時、中目院長は北京中央日本語学院、華北日本語教育研究所長を兼務することになり、忙しさが加わる（この二つの機関については第２章以下において論述する）。なお学生寮も造成されて（第一寮、のち維新塾と改名）、切磋琢磨の場となる（第４節参照）。

(2)　学則の仕上げと中目覺の真骨頂

日本専門学校令による専門学校の認可に向けて学科、授業科目の設定、教授陣容の整備に向けて中目院長は全力を傾注する。それまでの興亜院などからの出向者を減らし、人事の進行と呼応し、中目カラー十分の学則を作成する。昭和15年度学院管理運営の拠りどころとなっている学則（“暫定”学則と呼ぶことにする）と、15年度に専門学校認可を求めて作成している学則（“専令”学則と呼ぶことにする）との比較を表示したのが次表（表３）である。

表３　二つの学則の第二条の比較

	北京興亜学院学則（“暫定”学則）	北京興亜学院学則（“専令”学則）
条文	本學院ハ國體觀念ヲ涵養シ人格ヲ陶冶シ將來支那大陸ニ活躍スルニ必要ナル高等ノ知識技能ヲ授ケ以テ興亜ノ實踐力ヲ練成スルヲ以テ目的トス	本學院ハ専門學校令ニ依リ東亜ニ活躍スヘキ人材ヲ養成スル爲人格ヲ陶冶シ團體觀念ヲ涵養シ興亜ノ事業達成ニ必要ナル高等ノ知識技能ヲ授クルヲ目的トス
注目すべき語	国体観念，支那大陸	団体観念，東亜，専門学校令

備考：１．那須清編『北京同学会の回想』、不二出版、1995より作成。
　　　２．筆者が二つの学則に付した仮称“暫定”学則は、上述書 p.221、“専令”学則は p.259より引用。

中目が真剣に取組み作成した“専令”学則は“暫定”学則にあった国体(こくたい)観念を団体(だんたい)観念とし、支那大陸を東亜としているのである。国家主義の高まり・国体観念涵養の叫び高揚の時代趨勢の中にありながら、過度の国家主義を抑制している。

表4をみると学科目ならびに毎週時数に顕著な変化がみられる。それは表2と4の比較によって明白であり、中目カラーが色濃く具現されている。最も顕著なのは経国科の新設と第二外国語英語を取止めて蒙古語とロシア語（露語）を以って第二外国語とするものであった。ちなみに支那語の時間数は少し減った。経国科の新設によって支那学という学科目が消え、皇民科の内容も縮小される。まことに画期的改革である。“暫定”学則に謳われた国体観念涵養を“専令”学則で団体観念涵養と改める。内地で独語 Geopolitik の訳として地政学という語が一般に用いられていたが、中目覺は敢えて経国学と訳し国家主義的性格を抑え、その内容構成も日本のとは著しく異なったものにするなど独創性と国際性がみられる。

表4　学科目及び毎週授業時間数（“専令”学則によるもの）

学科目	内容	第一学年	第二学年		第三学年	
		夏学期	夏学期	冬学期	夏学期	冬学期
皇民科	倫理	1	1	1	1	1
	国語	2				
	日本文化史		2	2	2	2
経国科	法律及経済	5				
	商工経営				2	2
	教育				2	2
	世界事情					
	経国概論					
第一外語	支那語	12	15	12	15	12
支那学	大東亜史及大東亜地理	3				
	支那思想史		2	3	2	2
	支那経済史				2	2
	支那産業		4	4		
	支那金融及貿易				2	2
商業	商業実務	2				
第二外語	蒙古語	3	3	3		
	露語				4	4
体練科	教練	2	2	2	2	2
	体育武道	2	2	2	2	2
演習	演習	1回	1回	1回	1回	1回
計		32 1回	34 1回	32 1回	36 1回	33 1回

資料：那須清『北京同学会の回想』、不二出版. 1995。

“専令”学則に具現された中目院長の毅然たる態度を視たが、第二次世界大戦突入前後の日本の知識人の考え方、行動に照らしてみよう。後述繰上げ卒業、とりわけ学徒出陣の人々はSchicksalだ、Schicksalだ、運命だと入営していく。「中目覺はその「八十年間の思い出」の中で自分の哲学にはファタリズムという分子がある」と中目伊四彦氏が話したことがある[34]。Schicksal、fateは運命、宿命と訳される。しかしそれは単なるあきらめではない。敢て抵抗こそしないが、置かれた立場、地位で良心的に最善を尽くすことをいう。それが当時の知識人の生きざまであった。“インマル”加藤惟孝教務長が作成を担当していた“暫定”学則を、国家主義的性格を強めつつある時勢に流されず国家主義を抑制する“専令”学則に毅然と作りかえ、それで専門学校の認可をかちとった所に言葉の真の意味におけるFatalist（fatalist、宿命論者）中目覺の真の姿、生きざまがみられる。

4．中目院長の授業

中目院長は昭和15年興亜学院3年生に講じている。王進益は次の様に回想する[35]。

> 師はゆっくり講述された。週に何時間もの英語には皆出席し身につけた。また白土嘉雄教授に代行させた商業英語は卒業後の実務に役立った。われわれ3年生に、経国学の講義が週一回（6ヶ月間）あった。言語学を中心とした言語の分類、話術交渉要領、風俗習慣、経済事情を講ぜられた。師は語学にすぐれ、英語、エスペラントを重視された。そして学生の才能を伸ばす自由の学園たらしめようとつとめられた。若き日の旅行談、英米独仏と日本の差異、民主制度、中国の封建制度批判、多種多様な講演の様で一句一句をゆっくりかみしめながら話されるときの眼付きには国を憂うる心情があふれていた。

王進益のこの回想は二つの点において極めて重要である。その第一は専門学校に認可された暁に実施されることになっていた経国学の講義をその前年にしていたということである。昭和16年度は表2によって授業がなされ、表4は専門学校認可後となってはいたが、院長みずから認可後の授業科目経国学を教えていたのである。表4には経国科という学科の内容として5つが表示されており、経国概論と世界事情の2つについては配当学年も時間数も示されていないが、第3学年生を対象に中目院長自身が授業をしていたことが知られる。そして、表4に向けての人事が、後述のごとく昭和16年に着々と実現し、専門学校としての授業は前倒しで行われていたと考えられる。第二は、この昭和15年の第3学年に行なった授業が中目覺・経国学の最初であり（第4章参照）、それから引き続き充実錬成していくその原形というべきものであった。

5．在学中兵役徴集延期認可、入学試験という洗礼

年末12月23日、在学生徴集延期認可の朗報が届き、在学生の不安・不満が和らぐ。年度の終り近く、学校としては最も重要な入学試験実施となる。昭和15年入学者の半数退学という事態があっただけに、昭和16年3月13日に行われる入試志願者が第一回にあまり劣らない310人あった（表5）ことは、中目院長にとっては、安堵の胸を撫で下ろすに十分な数であったに違いない。

昭和15年興亜学院三年生に講じた経国学の講義が、16年北京中央日本語学院での講義となり、

表5　北京興亜学院入学試験

入試年月日	志願者（人）	定員（人）	試験場
第1回目（昭和15年3月25，6日）	370	100	北京本校，東京，大阪，福岡
第2回目（16年3月13日）	310	100	北京本校，東京，福岡
第3回目（17年3月14日）	206	100	北京本校，奉天，京都
第4回目（18年3月）		100	北京本校，大阪

備考：那須清編『北京同学会の回想』から作成。

同年作成の興亜学院の『授業要目』の中に学科目として大きな位置をしめる。表4でみるように、学科目経国科は5つの内容に分れ、そのうちの一つに経国概論がある。それについては第4章においてさらに論述する。

第3節　昭和16年度：旧制専門学校認可、繰上げ卒業

昭和16年4月に入学した田中実（興亜学院第5期生）は、堂々たる“押し出し”の院長の威容、和魂洋才の式辞に感銘を受けたという(36)。“禍福は糾(あざな)える縄の如し”とはよく云ったもの、前年、兵役徴集延期の朗報を得、引続き今年は念願の専門学校認可はかちとったものの、手塩にかけた教え子たちを繰上げ卒業させ、その多くは入営となる。

1．中目人事の進展

中目構想人事、表6に（新任教授）として示しているものである。蒙古語の徳広弥十郎教授

表6　中目院長の構想実現のための人事

（新任教授）				
教授	佐藤三*代治	（広島*高師卒）	倫理	昭和16年9月3日*
〃	徳広弥十郎	（大阪外語卒）	蒙古語	16年4月4日*
〃	永井豊太郎	（大阪商大卒）	法律	
〃	鈴木栄一郎	（東大卒）	国語、日本文化史	
専任講師	ロシア婦人 Brant 女史	（白系ロシア人）	ロシア語	

資料：那須清『北京同学会の回想』。*は筆者訂正、加筆。

は、中目覺が校長をしていた大阪外語の卒業生、内蒙古張家口の冀察政府文化部に勤めており、昭和16年度初めに来任する。引続き倫理学の佐藤三代治教授が９月３日着任する。いづれも、中目覺がその教え子の中から選んだ人物である。佐藤教授は生徒主事（課長）兼教授（皇国科の倫理学担当）として満州国立教員講習所主事兼教授であったところを抜擢したのである。同氏は中目覺が広島高師在勤中の生徒（教育科大正６年卒）、しかも同じ仙台出身(37)で、尊敬し信頼された長年の師弟関係にある。

さきに多数の退学者がでたことからも察せられるように、生徒指導という重要問題担当に最も相応しい人物であった。佐藤教授は、生徒課長、倫理担当教授として地味に中目体制を支え、中目院長とは住いも近かった。そして帰国後も親密な交際が続く。

2．“専令”学則前倒しの授業

“専令”学則で初めてでてくる経国概論を中目院長みずから15年度にすでに講じていたことを前節で述べたが、ここで昭和16年入学田中実（第5期生、18年９月卒、助手に任用さる）に、表２と４を比較しながら、授業科目について表２になく表４に出てくる「内容」があったかどうか、入学時（16年）のことを想起してもらった。その結果は次の如くである(38)。

> 外国語では、“暫定”学則に準拠する学年ゆえ第５期生は第一外国語は支那語、第二外国語は英語となっていた。しかし第二外国語たる英語の授業はなく、“専令”学則にみえるモンゴル語が教えられた。もっとも二年生（第４期生）は第一学年の時第二外国語として英語を学び第二学年では前倒しでモンゴル語を教わった。経国概論の授業は“専令”学則でやるようになっているが、中目院長は第５期生（昭和16年入学）にも、学年各組講堂に集めて授業をしていた。

このように“暫定”学則には示していない授業を、院長自ら講じており、専門学校令による専門学校に認定された暁に開講することになっている第二外国語を前倒しに、新しく招いた教授の赴任とともに授業を開始している。ちなみに一学年（約100人）は25人ずつの組（クラス）に分けられた小人数教育に徹していたのである。

3．専門学校認可、繰上げ卒業（第１回）

学院あげての努力の甲斐あって、12月22日に専門学校令による旧制高等専門学校に昇格。それに伴って12月24日に学科（支那語、支那学（東洋史）、公民（作文））の試験、26日に教練検定試験が実施される。教職員・生徒一体となって専門学校昇格をかちとったのである。２日置いて12月26日興亜学院第3回卒業式(39)が挙行される。中目院長が着任した時、興亜学院第１学年の最終の月（３月）であった生徒達である。生徒の大部分は第1回“繰上げ卒業”（“12月卒業”）で、翌年２月に入営する。北京の現地で12月５日、徴兵検査が行われ、卒業生61名のうち26名が受検し、甲種合格６名、第一乙種合格15名、その他５名で、甲種、第一乙は現役入営となる(40)。これは学院長としてはまことに心痛む事であるが、学校レベルではまことに如何ともできぬ事である。学院としては最も充実した年であった筈なのに、その学年の最後、すなわち冬学期は、

あわただしく悲壮感みなぎる年となったのである。

第4節　昭和17年度：特色ある充実したカレッジ

専門学校の認可をうけ、ユニークな学則によって二期制（夏学期と冬学期）をとる。これはドイツの制度を想わせる。もっとも中国では一年二期制をとっていた。“専令”による専門学校となっても、日本内地で採っていた三学期制には変えていない。さらにユニークなのはシラバス（「教授要目」）を作成するところまで指導体制をすすめる。

1.『教授要目』（北京興亜学院、昭和17年度）の配布

入学式は4月7日、講堂にて挙行、中目院長式辞のみで簡単にすむ。式後二年生田中実のタクトを執る指揮のもと校歌の練習があった(41)。

この『教授要目』こそ院長中目覺の着任以来2年間の学院管理運営の成果、努力の結晶である。今迄断片的に叙述したことがこの小冊子に集約されている（表7）。

認可を受けるための学則のなかで重要部分である学科名及び授業時数（表4参照）をさらに、一歩踏み込んだ『教授要目』によってみると、さきに提出し審査を受けていたものを微調整していることが分る。この『教授要目』によって昭和17年度の授業が全学的に進められたのである。

表7　学科名・教授科目

学　科	教　科
皇民科	倫理、国語、日本文化
経国科	法学通論、経済、商工経営、教育、経国概論、世界事情
第一外国語	支那語、習字
支那学	大東亜史及大東亜地理、支那思想史、支那経済史、支那農業、支那商工概論、支那金融及貿易
商業	商業地理、商品学、珠算及商業作文、商業簿記
第二外国語	蒙古語、露語
体練科	教練、体育武道
演習	

備考：『教授科目』北京興亜学院、昭和17年度より作成。

中目覺は第三学年で経国概論と世界事情を教える。その内容は表8の如くで、“中目（なかのめ）経国学”の構成・内容がこの表8から窺われる。

表8　院長中目覺の授業要目

（八）経国概論　3学年　毎週1時間			
			教授　中目　覺
上篇	地理的条件	第一章	居住圏
		第二章	産物
		第三章	住民、人口
下篇	政策	第四章	通信
		第五章	運送
		第六章	移民
		第七章	自給自足
		第八章	防備
		第九章	文化
（九）世界事情			
人類の起原、発達		ピテカントロプス　エレクッス、シナントロプス　ペキネンシス、ホモ　ハイデルベルゲンシス、ホモ　ネアンデルタレンシス、原人、牧人、農人。	
民族		褐色人、黒人、白人	
語族		単綴語、添加語、屈折語、	

備考：『教授要目』より引用。

ついでに学院のキーパースン二人についてみよう。教務長加藤惟孝教授は、経済（第1学年に週1回）、支那経済史（第3学年に週2時間）、支那農業（支那産業）を第2学年に毎週2時間。生徒課長佐藤三代治は、倫理学を第1、2学年に週1時間ずつ、教育を第3学年に週2時間ずつ、その他習字を第一学年に週一時間ずつ教える。

興亜学院の何よりの表看板は支那語、しかも北京官話（本場の発音）である。第一学年は毎週11時間、前清貢士高玉珊（写真1）をはじめ、名だたる中国人講師5人が担当、使用教科書をみるに6種類あり、特に注目を引くものが二つある。その一つは『注音符號表』（本学院編）である。これを使って注音記号の発音訓練を教師と生徒が1対1で顔のつき合わせで行われたことである。もう一つは京大教授倉石武四郎編のものが二種類使われていることである。その他の教科書は北京に従来からあるものである。第2学年の授業時間が最も多く、週15時間、5人の中国人が担当、教科書は5種類、すべて北京のものである。第3学年は12時間を白坂農太郎教授と二人の中国人講師が担当という形であった。外国語教育で問題になる直接法か対訳法という点からみると徹頭徹尾直接法、oral method であった。上述の如き教科・科目ごとの充実は教授陣の整備と表裏をなすもので、この昭和17年は学院として最も充実した年である。既

に述べたごとく前年度から手掛けていた教員人事案件も進み17年4月以降、以下に示すように完了する。

昭和17．4．8付　鈴木栄一郎・永井豊太郎　両教授
福隆阿　蒙古語講師
昭和17．5．4付　秋元亮太　露西亜語助教授
つづいてブラント女史　ロシア語講師
昭和17．9付　田中潔　支那語助教授　兼　塾頭

中目院長のめざす教授陣もこれで整った。生徒数も表9でみるごとく昭和17年が絶頂である。

ロシア語の専任講師任用は、中目院長が最も力をいれた人事の一つであった。17年度初めの『授業要目』頒布には間に合わず、秋元亮太助教授担当で出発するがおくれて着任する。興亜学院第5期生の田中実は、「ロシア語では、native speaker 白系ロシア人の招聘に格段の尽力をなされたように聞いています。ある雨の日、新築校舎の昇降に、新しく招いた気品溢れるBrant 女史の頭上に出席簿をかざして導いておられる中目先生の洗練されたマナーズに感じいって眺めた記憶が蘇ってきます」と興味ある報告をしている(42)。

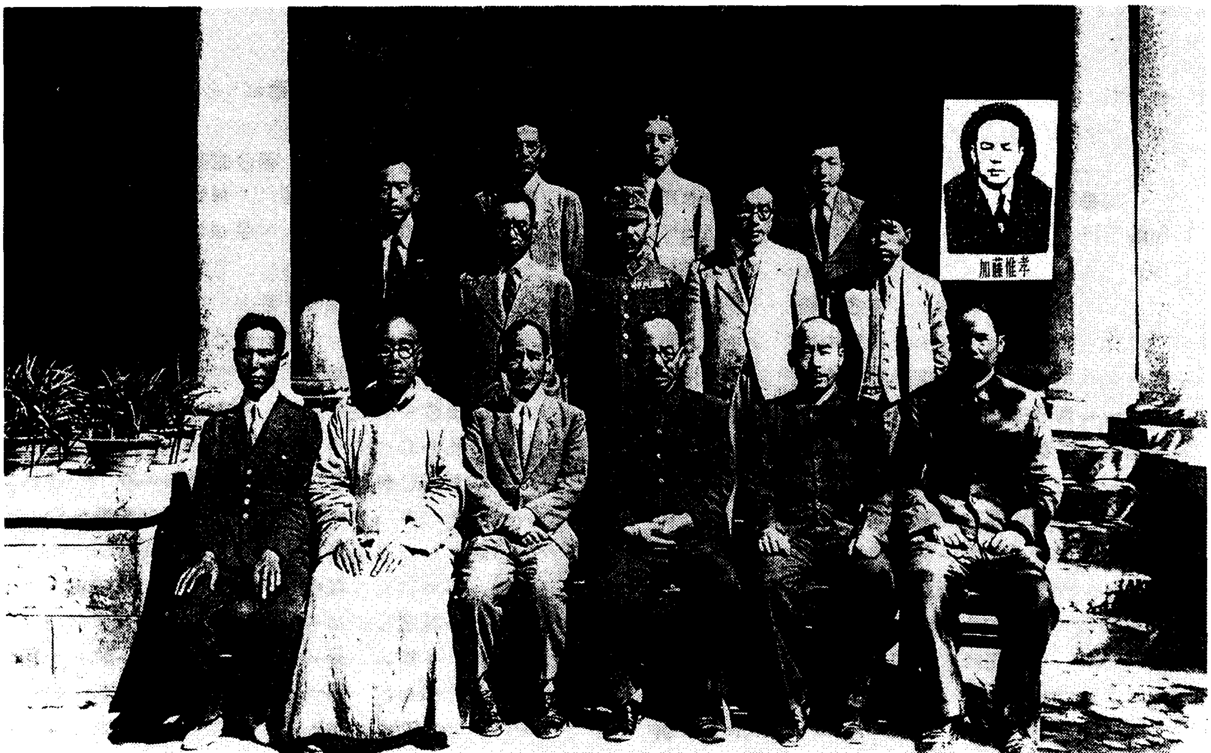


写真1　北京興亜学院教授陣（昭和17年（1942）4月）

杜　展雲　　高　宗瑞　　松尾康次
常　啓光　岡本愛次　岩田久平　鈴木義之亮　徳広弥十郎
福　隆阿　高　玉珊　鈴木栄一郎　中目覚　佐藤三代治　曹　幼川
（欠）白坂農太郎　加藤惟孝　永井豊太郎　王　宗藤　陳　学敏女史
（備考）『北京遊学想い出アルバム』（故 春日武雄 複写提供）

“屋根瓦方式”。寮では二年生は一年生を、三年生は二年生をという風に教える慣行ができていた。学生の3分の2は自宅又は親類・縁故からの通学であったが、3分の1は寮生活で上級生から受けた薫陶は大きかったと森下博は話す(43)。この学生間の切磋琢磨は“屋根瓦方式”と呼ばれ、昭和15年に寮ができてから二年を経て、17年には1、2、3年生が揃い、充実し一つの学風として定着をみつつあった。

表9　北京興亜学院在校生（1942年7月）及び情報提供者

入学年月	興亜学院期生	学年	人数	資料・情報提供者（順不同）	卒業，入営（出陣）		経専期生
昭和15.4	4期	3	61	那須*，春日*，長岡，中楠，大槻史郎*	繰上卒業（第2回目）17年9月5日	17年10月1日（現役は）入営	
16.4	5期	2	104	田中実，相原稔	繰上卒業（第3回目）18年9月25日	18年10月～12月入営	
17.4	6期	1	124	森下，清野，大槻清	入営者に仮卒業証書．18年11月20日	学徒出陣 18年12月1日	1期

備考：1．那須清編『北京同学会の回想』、森下博『北京興亜学院長中目覺先生の思い出』、『森下書簡』。
2．*を付した方は2003年現在、鬼籍に入っている。

鶴田義郎は三年生の那須さんから、スエーデンの中国語学者カールグレン博士の『支那言語学概論』（魚返善雄・岩村忍訳）を読むようすすめられたので四百円（ママ）は学生当時の私にとっては高価なものであったが、早速購入して読んだ。そして西洋人で、こういう中国語学の著作があるということに大きな驚きを感じた。私が西洋人の中国研究に眼を向けるようになったのは、この時からである(44)と、知的興奮と先輩を回顧しており、多様な面々が集った自由な小規模学舎の善さが偲ばれる。

2．同学会40周年記念

学院並びに中目覺院長にとって最も記念すべき行事が、17年6月10日に挙行された。この創立40周年記念式典（1903；明治36年～1942；昭和17年）には、「北京の興亜院華北連絡部文化局、大使館、同学会関係より代表者が参列、祝辞が述べられた。これは印象的な記念行事であり、そして「創立四十周年記念ハガキ」(45)（昭和17年6月10日）も作成された。華やかな行事に引続いて、報国団結成など厳粛かつ勇壮な儀式が執り行われる。

団員代表中楠彧は「開校四十周年のこの佳き日に我々は旧套をかなぐり捨て…新しい道を究進するのみだ。亜細亜は一つたらんとして若き我等の手を拡げて待っているではないか」(46)と若者の純粋な心を吐露している。永井至純作詞「報国団歌」(47)は、今もわれわれの心に強く訴える。

1．丁香花に柳絮飛び
城壁霞む春なれど
堅き誓ひの若心は
夢に祖国を憂ふなり

4．異国の言葉学べども
忘れじものは師の君の
雪にゆるがぬ松柏の
永久につきせぬ教へ哉

2．、3．略

3．繰上げ卒業（第2回）

教授陣、施設とも充実整備充実したものの、時局はますます急を告げ、昭和18年3月卒業の筈の生徒が17年9月卒業となる。ちなみに卒業生48名のうち、23名は既に4月11日現地北京偕行社において臨時徴兵検査を受けており、その結果は甲種合格7名、第一乙種合格10名、第二乙種合格3名、第三乙種合格1名、丙種合格2名であった[48]。従って甲種と第一乙種合せ17名は現役兵として入営となる。第2回目の繰上げ卒業となる第4期生は中目覺院長が第2回入学式で受け入れ、最初から手塩にかけた生徒で、熱血漢も多く、院長に詰め寄り、或は授業放棄までしたこともあり、人数も少なく（約60人（表9）、院長との心の触れ合いが大きかった。それだけに、共に格別感慨深いものがあったようである。

4．まめな中目院長先生

中目覺は健康・健脚であり、誠実でいろいろな会合にもつとめて参加した。ここにその2例をあげよう。第1は、「日本語学院弁論大会（昭和17年）へ一般席にて聴く（院長でありながら)。上級生（興亜学院第4期生）が繰上げ卒業のため、興亜学院第5期生が最上級生となった。昭和18年早春、日本語学院の弁論大会に、興亜学院からゲスト演者（中国語による）をということになり、白羽の矢が自分に立てられた。急いで原稿を用意し、4、5人の中国人講師の前で予行演習をして出席、中目院長先生が一般席におられたのが懐かしく想起される」と田中実（興亜学院第5期生）は院長のゆかしさを改めてかみしめる[49]。

第2は、春（5月2日）の万寿山行、秋（10月7日）明(みんの)十三陵行である。万寿山往復は24㎞にすぎないが、明十三陵往復は実に100㎞という長距離である。生徒とともに全行程を歩き、師の率先垂範に生徒は敬服した[50]。

（付）　昭和18年度：院長の大同雲崗石仏見学行と離任東帰

昭和18年4月初め、北京を離れる直前、大同雲崗の石仏を見に4月のあの時候外れの雪を冒して出掛けられたのだが、帰って来られてから大同の石仏とアジャンタやビルマの石仏などに就いて先生一流の御高説を聞かされた。悪い癖で、折角の良い話も、聞流してばかりゐて、この時もそうだが、ついに今以てその名は想い出せない。ともかくビルマの何とか云う有名な石仏と大同のそれを色々比較された上で、「どうも大同の石仏と、ビルマの石仏とは関係があるようだという結論なので少なからずびっくりした。先生によれば、大同の石仏には西域やギリシャの影響は却って僅かで、むしろ南方、特にビルマに残っている石仏と相当な類縁が石仏の容貌の上に明かに認められるということであった[51]。離任ぎりぎりまで、行動し、旅の観察

を述べる中目覺の姿が髣髴とする。

記録によれば[52]、

4月5日　中目覺学院長退職。興亜院華北連絡部事務官別所孝太郎学院事務取扱ニ就任。

4月8日　新旧院長送迎式。

中央日本語学院での中目院長の授業を受け、興亜学院に勤めていた王久齡の「送中目院長東帰序[53]」（中目院長の日本帰国を送ることば[54]）から中目院長が、中国人に如何に愛惜されたかが知られ、師たる者まさに以って冥すべしというべきであろう。

相原稔（興亜学院第5期生）は「18年4月学院を辞職され、北京を出発して帰国されました。その折全職員全学生が北京駅頭で名残を惜しみ、お見送りしたことでした」と回顧している[55]。

第5節　昭和19年以後の北京興亜学院・北京経済専門学校：時勢の浪を激しく受けて

1．北京興亜学院第6期生（北京経専第1期生）より北京経専第4期生までの期ごとの概観

昭和18年の前半は穏やかに過ぎ、9月25日興亜学院第5期生の繰上げ（第3回）卒業式が挙行される（表9）。そして第2学年が第3学年に進級す（表9）。ところがこの新3年（第6期生）は卒業を待たず“学徒出陣”となるのである。第6期生は、昭和17年度4月入学124名、そのうち62名（表10参照）が18年11月仮卒業証書の下付を受け学院から営門への道を辿る。

興味深く意味深い統計表（表11）がある。この表からさらにいろいろ重要なことが読めるが、その一つは昭和18年9月までは各学年に、そろって生徒がいるということである。そして昭和18年9月以後は、時勢の荒波が生徒の現況に大きく反映してくる。

“学徒出陣”のうちの一人森下博は昭和18年9月3日に第3学年に進級、その3ヵ月後11月20日仮卒業証書を下附され、学業半ばで12月1日現地入隊（山西省運城市）し、やがて保定陸軍予備士官学校へ派遣され、卒業（予備士官学校第11期生、山砲隊）し、見習士官として中国戦線を、武漢へ、そこから先はもっぱら徒歩で更に南下し、ベトナムからタイへ転進する[56]。ちなみに、北京興亜学院は昭和19年校名が北京経済専門学校と改名されるに伴って、森下ら北京興亜学院第6期生は北京経済専門学校第1期生ということになる。

“学徒出陣”を免れ学院生活を続けていた者（約47名、表10）は、校名を改めた北京経済専門第一回卒業式（昭19.9.18）をあとに、あるいは内地あるいは大陸の部隊に入営する。この卒業式が、北京経専にとって唯1回の卒業式となる。つまり、それ以後は卒業証明書発行（第2期生）、在学証明書発行（第3期生）という事態になってしまうのである。

興亜学院第7期生（北京経専第2期生）以後の学院生活は第6期生とは比べものにならないほど惨めな事態になっていく。その情況を8期生の上野昭夫（てるお）の著書[57]から要約しよう。昭和19年夏以後は学校としての体をなさなくなっていたといえる。昭和19年度改正の徴兵令で満18歳で徴兵検査を受けることになる。第7期生は19年10月1日から入隊が始まる。20年5月には戦

表10　北京興亜学院から北京経済専門学校移行期の入学・卒業・入営
―資料情報提供者を中心に―

北京興亜学院（期）	区分 昭和	入学 興亜学院	入学 北京経専	卒業・入営 興亜学院	卒業・入営 北京経専	北京経専（期）
6期	17年	森下　博 大槻　清 清野正善 鶴田義郎 中下正治* 中島八太郎		9月5日繰上げ 卒業4期生 長岡英雄 那須　清* 中楠　・		経専（1期）
7期	18年	清水谷実治 橋本　功*		9月25日繰上げ 卒業5期生 田中　実 相原　稔	11月20日仮卒業 学徒出陣・6期　経1	経専（2期）
8期	19年	石井秀雄 上野昭夫* 江田　清* 上尾龍介 松谷幸治			8月1日改称北京経専 9月18日経専第1回卒業式・10・1入隊 10月1日，7期・経専2期10名入隊	経専（3期）
経専	20年	野田豊人 斎藤正男 塚田忠博	4月入学		8期（経専3期）昭和20年3月入隊 6月学徒動員 9月25日経専2期生に卒業証明書発行・東京	経専（4期）
	21年		経専3期に対し21年5月20日在学証明書発行・東京			

備考：1．森下博の協力によって作成．
2．*を付した方は2003年現在鬼籍に入っている。3．期生は入学時で呼んでいる。それにはかっこを付けていない。かっこを付しているのは相当する期を示す．
3．期生は入学時で呼んでいる。それにはかっこを付けていない。かっこを付しているのは相当する期を示す。

時教育令によって授業は停止。年齢のゆえに徴兵から免れていた21名に対しても、20年6月5日には学徒勤労動員令が出され、北京経専学徒は中国語可能の故を以て解読または現地交渉部門を持つ北支派遣軍司令部管下の各機関に配属された。

第3期生に就いてみれば、内地からの入学生は、昭和19年3月、下関に集結、迎えに来ている田中実助教授に連れられて朝鮮経由で北京に赴く[58]。北支の戦況は厳しさを加えており、この田中助教授（華語）も19年の秋、臨時短期召集され山西省運域の部隊に入営する[59]。第

表11　北京興亜学院昭和18年度生徒現況（昭和16年入学・五期～昭和18年入学・七期）

区分 / 学年級 / 月別	在籍人員			現在人員			休学人員			退学人員			備考
	1年	2年	3年	1年	2年	3年	1年	2年	3年	1年	2年	3年	
4月	93	**130**	95	82	**107**	80	2	**23**	15				
5月	93	**130**	93	84	**106**	80	6	**24**	12	2		3	
6月	90	**130**	92	83	**106**	79	6	**24**	13	1			
7月	89	**130**	92	82	**106**	79	7	**24**	13				
8月	89	**130**	91	82	**106**	78	6	**22**	13	1	1		
9月	85	**129**	91	79	**100**	76	6	**19**	15	3	10		(五期) 3年生卒業、(六期) 2年生第3学年ニ進級
10月	85	22	**112**	79	0	**100**	6	22	**12**				
11月	85	22	**61**	64	0	**47**	21	22	**5**			**62**	退学 62 名ハ入営ノタメ仮卒
12月	70	26	**61**	62	0	**46**	8	26	**15**				
1月	71	25	**61**	62	0	**43**	8	25	**17**			**1**	
2月	73	25	**61**	57	0	**42**	1	25	**18**	5		**1**	
3月	58	25	**60**	57	0	**42**	1	25	**18**				

備考：霞山会編『東亜同文会史・昭和編』(2003年) によるが、この表は森下博が現況の次に五期～七期を加えて『森下、思い出集』(2001) に収録・公表している。筆者はそのかっこ内をさらに詳細にし，そのうえ、第1回“学徒出陣”していく第６期生の進級・仮卒などと関連する月ごとの数字などを**ゴシック体**で示し、表の理解を一層便ならしめた。

３期生は、前述の改正徴兵令の適用を受けて、入学生101人のうち80人もが翌20年夏入営（無残にもシベリヤ抑留病歿者7名）[60]、年が達しなかった者は学徒動員となる。

最後の入学生（昭和20年４月、北京経専と校名が改まって最初の入学生、ただし、昭和17年興亜学院入学者が北京経専第１期生に当ることから数えて北京経専第４期生）のうち内地合格者は渡航ができず、現地合格者のみ北京本校の門をくぐる。校舎は間もなく軍の使用となり、修学は困難となり、入学後わずか一カ月、20年５月の戦時教育令によって授業廃止となる。

２．終戦前後の授業

以上、興亜学院第６期生（北京経専第１期生)、興亜学院第７期生（北京経専第２期生)、興亜学院第８期生（北京経専第３期生)、北京経専第４期生と期ごとの情勢を記述してきた。ここで北京経専の終戦前後の授業の状況を述べよう。

昭和20年４月頃の授業に就いて、三嶋敏雄（中国語教授、教務担当）が次のように回想している[61]。

人員不足のため毎日の時間割編成にはほとほと困り抜き、私の中国語は大抵一日に四

時間の状態が続く。二年生、三年生はまだいいとして一番困ったのは、新入生の取扱いである。当時、中国語組から進学した者はいいが、英語組で内地から来た者は、てんでいろはも分らないのである。それを一緒に授業しようというのだから無理な話で……。

6月20日頃全学に勤労動員令が下り、各学年とも夫々部署に配置され、私は三年担当として旧英国兵営に通った。学校は勿論学生不在、かくて日本人教授と職員は徴用、中国人や蒙古人その他外国人教授や中国人職員は失職する。

三嶋教授にも6月末には河南省新郷で入隊せよとの赤紙(あかがみ)がくる。

6月5日の学生勤労動員式(62)から70日目に終戦となる。その直前の8月9日、復員して北京経専に帰っていた田中実助教授は、校長事務取扱山田昊から20年4月入学生（北京経専第4期生）が勤労動員に行っている豊台の貨物廠へ出向いて至急学生を引率して学校へ連れ戻せとの命を受ける。豊台駅へ着き立寄った中国人経営の食堂で、店の親方が日本は負けたという。そう云えばちらほら青天白日旗が街角で目にはいった。日本の敗戦感じつつ第4期生を連れて帰り、無事校長に報告する(63)。これは、学生の9割以上が戦地にあり、残る1割弱は勤労動員先にいる(64)といわれていたその動員学生を終戦混乱直前に連れ戻した真相の一端である。北京に戻ってきて、誰いうとなく連絡がつく。表向きは終戦と同時に廃校であったが、授業再開への渇望が復活して、臨時の学舎が出現した。学校再開への期待への回答は、無情にも学校閉鎖のみであったが、自発的な学生と教師による、しかも不確定学生を対象とした授業が持たれたが、数日で行き詰まる(65)。生徒も教師も次ぎ次ぎと帰国する。そして昭和20年9月北京経専第2期生（18年入学者）は、卒業証明書が東京に於いて校長事務取扱山田昊から交付される。そしてまた第3期生（19年入学者）は、その翌年（21年5月20日付）在学証明書が交付される（表10）。

3．戦後北京での「一師一書生」：興亜学院・北京経専の神髄

塾教育のよい点を色濃く残して出発した北京興亜学院は小規模人数教育に徹し、昭和19年8月1日、その名称を変えた北京経済専門学校にも継承されていた。その最後は、高玉珊老師と若い上野昭夫の「一師一書生」という塾に戻りそれが数ヶ月も間続いて(66)終焉を迎えた。それはまことに興味深く注目すべきことである。ちなみに、高玉珊氏は興亜学院・北京経専の華語の看板教師である、卒業生から尊敬されている華語音韻学者である。古史学者・歴史地理学者としても超一流であることが上野昭夫の著書によって知られる。「一対一」で日本人愛弟子に伝えたかったものは『山海経(せんがいきょう)』を媒体としての、東アジア古代歴史地理であったのではなかろうか。

4．中目覺院長、加藤惟孝教務長の再起

学舎から兵舎へは、既に述べたように若い学生だけでない、教務長加藤惟孝教授も19年1月現地入営となる。

中目覺は昭和18年5月帰国、枚方(ひらかた)の青葉山で晴耕雨読の生活にはいる。中目一家の戦争によ

る直接犠牲は大きく、あまりにも痛ましかった。敗戦、逆縁の打撃から、立上がって中目覺は、語学力を武器に大阪軍政部通訳をつとめる。そして、新規公職希望者に対する資格検査と公職資格審査を受けて適格認定証を得て、高齢を物ともせず、更に社会に出、著述もする。この件に就いてはいずれ稿を改めたい。

教務長加藤惟孝は無事復員後、公職に就く。東京文理科大学、東京教育大学教授として活躍する。そして下記の如く主穀の生産力の研究のほか、中江丑吉研究をし多くの著作を刊行する[67]。

(1) 水稲生産力消長の構造／加藤惟孝[著]. —[出版社不明]. 1956
(2) 第一次10郡の概括及び基本加工資料／加藤惟孝[編]. —[加藤惟孝]. 1958. —（経営規模別農家分類の動態的変化に関する地域性把握の統計的研究／加藤惟孝[編]：昭和32年度）
(3) 経営規模別農家分類の動態的変化に関する地域性把握の統計的研究／加藤惟孝[編]：昭和32年度、昭和33年度. —謄写版. —[加藤惟孝]. 1958
(4) 水田主穀生産力の展開／加藤惟孝著. —農林水産業生産性向上会議、1960. —（日本農業分析資料：3）
(5) 麦生産力統計分析資料／加藤惟孝編. —農林水産業生産性向上会議、1962. —（日本農業分析資料：4）
(6) 兆民の子—中江丑吉の記録のうち—、『童説』、1963
(7) 鈴江言一・伊藤武雄・加藤惟孝共編『中江丑吉書簡集』. みすず書房、1964
(8) 北京の中江丑吉：ある個性の記録／加藤惟孝著：阪谷芳直編. 勁草書房. 1984

組織・機関の長及びその次に位する人物の学識が機関の性格を大きく特色づけることは言うまでもない。教務長加藤惟孝の著作をここにあげた所以である。なお上記『中江丑吉書簡集』の編集については北京興亜学院第5期生平和彦（国会図書館）と北京経専第1期生中下正治（東洋大学）が協力している[68]。終生変らない師弟同行の美しい姿が窺われる。

〈小括に代えて〉

ちなみに、中平正治「学院創業記」（注9参照）の原本とみられるＢ4版3枚のゼロックスコピーが王進益から、筆者の依頼に呼応して校閲してくれた初稿とともに送られてきた（2004年1月22日)。その原本をみると注(9)にはない文面があり、それを王氏が次の如く一部変更している。

中下原文：専門学校への道を歩むのに力をいれたのは加藤氏であり、これが充実への道をつけたのは興亜院の辻田氏と久保氏である。（頭点筆者）

王　進益変更：（あるを消して）“仕上げたのが中目覺であった”（と加筆している)。

王進益の文章は筆者提示の仮説と検証に対する賛意であると有難く受けとめたい。

本論文(2)の目次

第２章　北京中央日本語学院：師弟一体、濃密な教育実践
第３章　華北日本語教育研究所：ユニークな組織とリベラルな研究
第４章　座談会、研究物：中目覺の存在感
第５章　華北日本語教育研究所の組織変革：日華同盟条約の反映
総　括

注

(1)　藤田佳久編著『東亜同文書院　中国調査旅行の記録』vols.1～4、大明堂、1994～2002.

(2)　那須清『旧外地における中国語教育』、不二出版、1992 (pp.91～95).

(3)　仝上『北京同学会の回想』、不二出版、1995.〈結語に代えて〉(P. 122) 参照。

(4)　筆者石田寛は次の如きを公刊している.

「中目覺と広島高等師範学校」、『地理』、44-11、古今書院、1999、11月.

「エリート教授中目覺―２番目に早い高等教育、地理（広島高師）プログラム創始者―」、『広島大学史紀要』、第２号、2000、３月.

"Akira Nakanome 1874-1959", *Geographers: Biobibliographical Studies,* vol.20, New York, 2000, ６月.

「多才な地理学者・中目覺― "新しい逍遥学者"：学際研究、地域研究の先駆者―、『地理科学』、55-4, 2000, 10月.

「中目覺先生―多才・先駆的学者・教育家」、『宮城県東和町・寿庵文庫目録』、2001, ３月.

(5)　筆者石田寛は次の如きを公刊している.

編「文学部」、『広島大学二十五年史』(松岡久人編集委員長)、広島大学、1977.

編著『豊田小学校創立百周年誌』、記念事業実行委員会、1987.

共編『福山大学二十年史』、福山大学、1995.

(6)　co-eds: *Let's learn spoken Japanese,* Waikato University, 1963.

(7)　"An Introduction to the Intensive Japanese Program", *An Annals of International Exchange,* No.1, Fukuyama University, 1998, ４月.

(8)　那須清編『北京同学会の回想』(以下、『那須回想』と略す)、不二出版、1995.

(9)　仝上　特に中下正治「学院創業記－加藤惟孝氏からの聞き書より」(『燕京』第７号、1974年より)、pp.62～69参照).

(10)　仝上

(11)　『森下書簡綴』.

⑿⒀森下博編『北京興亜学院長　中目覺先生の思い出』（以下、『森下、卒業生思い出集』と略す）、私家版、1999、9月.

⒁　那須清『前掲書』、141p. 注62を参照.

⒂　『森下書簡綴』.

⒃　伊地智善継談（1999年7月）.

⒄　『森下、卒業生思い出集』.

⒅⒆『那須回想』.

⒇　『森下、卒業生思い出集』.

(21)　仝上. 今井祥子「王進益にとっての短歌」、『植民地文化研究』2号、2003. なお、王進益（冬梅）は2004年1月から台湾歌壇代表.

(22)　仝上

(23)(24)『那須回想』.

(25)　鈴江言一・伊藤武雄・加藤惟孝共編『中江丑吉書簡集』、みすず書房、1964.

(26)　『那須回想』.

(27)　『森下、卒業生思い出集』.

(28)　『那須回想』.『春日・那須メモ』

(29)　『那須回想』.

(30)　（注32参照）

(31)　春日武雄・那須清『北京興亜学院第4期生関係主要事項表』（以下、『春日、那須メモ』と略す）.

(32)　『森下、卒業生思い出集』.

(33)　『春日、那須メモ』.

(34)　中目伊四彦談（2000年）

(35)(36)『森下、卒業生思い出集』.

(37)　佐藤三代治履歴書.

(38)　『森下書簡綴』. また、田中・森下両氏がさらに電話で話し合ったものによる.

(39)(40)(41)(42)(43)『森下書簡綴』.

(44)　鶴田義郎「那須清さんのこと」、*TONG XUE*、同学社、1999、11.

(45)　『森下書簡綴』.

(46)(47)『報国團誌』創刊号. 昭和17年6月10日.

(48)　『那須回想』.

(49)(50)『森下、卒業生思い出集』.

(51)　秦　純乗「中目先生のこと」、『華北日本語』第2巻　第6号. 昭和18年6月.

(52)　『那須回想』.

(53) 中目伊四彦提供、『森下、卒業生思い出集』.

(54) 田中実訳.

(55) 『森下、卒業生思い出集』.

(56) 森下博談.

(57) 上野昭夫『燕都の残照　天の巻・高氏山海経と古史概考』、ツーワンライフ、1996.

(58) 『那須回想』.

(59)(60)『森下書簡綴』.

(61) 三嶋敏雄「終戦前後の北京経専」、『那須回想』.

(62) 6月5日北京の日本系学校は専門学校2校（北京経済専門学校、華北工業専門学校)、中等学校5校及び小学校6校の学生・生徒が東単の練兵場に集合し長時間の式典が行なわれ、経専の学生は直に配属先へ出動する．ちなみにその当時（終戦直前）の北京在留日本人数は約50万人、北京総人口は概算550万といわれていたから約10パーセントが日本人であった（上野昭夫『燕都の残照　地の巻』ツーワンライフ、1998)。

(63) 上野昭夫『前掲書』

(64) 『森下書簡綴』

(65) 上野昭夫、1996.

(66) 上野昭夫、1996、1998.

(67) NACSIS WEBCATによるところが多い.

(68) 『森下書簡綴』.

あとがき

中目伊四彦・岡田俊裕及び北京興亜学院卒業生王進益・田中実・森下博ら諸氏の校閲をえ、孫石田慎一の応援作業協力をえた、記して深謝したい。

石　田　　　寛

A Developmental Process of Higher Education for Japanese in the Field of Humanism and Socio-Economics and the Teaching of Japanese Language, in Beijing Before the End of World War II

— with special reference to President Akira Nakanome —

(1)

Hiroshi ISHIDA

Objective and Significance;

One college of higher education in the field of Humanism and Socio-Economics was being operated in Beijing at the end of World War II. However, though a book of reminiscences has been published, no history of the college has ever been written. By utilizing graduates' memoirs heavily, the present writer plans to clarify the process of higher education in Beijing in those days with special reference to Akira Nakanome, President of Ko-a College.

In accordance with a request to assume the presidency of Ko-a College in Beijing, Akira NAKANOME, ex-President of the Foreign Language College of Osaka, moved form Osaka to Beijing on March 1, 1940. He was expected to reorganize the Chinese Language School to raise it from the status of a higher commerereial school to that of a college by college regulations.

Hypothesis and Keywords;

The College of Higher Education in the Field of Humanism and Socio-Economics for Japanese in Beijing was founded and developed by Akira Nakanome. The Chinese Language School was reorganized to raise its status to become Beijing Ko-a College. Nakanome, President *-cum-*trustee, dealt with determination to shape-up and reform the subject organization and to reframe college regulations. Promotion of the College status was approved. Two affiliated institutions, Central College of Japanese Language and Research Institute of Japanese Language, were also organized and systematized by Nakanome, leading to remarkable development in a phonetically-based *kana* system and teaching methods. Nakanome's period of service was overwhelmingly long and of significance in the history of Beijing Ko-a College and the renamed Beijing College of Economics.

Keywords; college regularities, syllabus, college regulations (専門学校令), postponement of enlistment, Dogakkukai Foundation, Toadobun Foundation, geopolitics, teaching of Japanese Language, direct method (直接法), translation method (対訳法), fatalism (*Schicksalsglaube*)